

年間第 5 主日 (マタイ 5:13-16)

常に「塩」を保って福音をもたらす家族



「塩と光」。イエス様の時代には貴重な品だったでしょう。いつか聖書と典礼の後ろの頁にパレスチナで過ごした人の経験が書かれていて、就寝時に灯りを消すと、本当に真っ暗になり、電気に不自由しない日本では体験出来ない暗闇を体験したと書いてあるのを読みました。

塩もまた、食べ物の味を決めるため、食材を長く保存するためにどうしても必要な物だったでしょう。「生活を支えるのにどうしても必要なもの」を、イエス様は「塩と光」で表現したのではないのでしょうか。

しかも、「あなたがたは地の塩である」「あなたがたは世の光である」と、イエスを信じる者一人ひとりが、社会にあって「地の塩」「世の光」となることを願っています。12人の弟子たちだけでなく、イエスの声に耳を傾けるすべての人にです。

どのようにして、期待にこたえれば良いのでしょうか。まずはイエス様がお手本です。次のように言っています。ヨハネ福音書 8 章 12 節です。「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ。」

私たちを通して、すべての人が、自分たちは暗闇の中を歩いていない、そして命の光を持っていると感じられるように働きかけること、寄り添うことが「地の塩」「世の光」の使命ではないのでしょうか。しつこく働きかけるばかりではなく、まことの希望のために寄り添うことが求められています。

皆さんの中に、カトリック信者とそうでない方との結婚をなさった夫婦がいらっしゃるでしょう。できれば、両方ともカトリックになってほしいわけですが、カトリックの洗礼をためらう配偶者に、勇気を出して勧めることが出来ないまま、何年も、何十年も、時間を費やしてきたことを気に病んでいるかもしれません。

ただ、その間に、カトリック側の私は、「地の塩」「世の光」として配偶者と歩いてきたのか、振り返ってみてください。これからも時間は続いていきます。これからも「地の塩」「世の光」として、そばにいて寄り添っていく覚悟があるか、もう一度考えてください。

「塩に塩気がなくなれば、その塩は何によって塩味が付けられよう。」続きがありますが、恐ろしくて言えません。結婚生活で「地の塩」であるべきカトリック信者の側が「塩気がなくなれば」家庭の中でカトリック信者としての意味合いはどうなるのでしょうか。

いつまでも塩味を保って、夫婦として共に歩いていく。家庭に、塩味をもたらす。そうしていかなければ、配偶者がいつかカトリックになってくれればとあなたが気に病んでいるその「いつか」も遠のいてしまいます。覚悟を決めて、自分は「地の塩」「世の光」として生きると誓った時に状況は変わります。時が満ちれば洗礼への道も必ず開きます。

更に一つ付け加えましょう。イエス様は私たちを「地の塩」「世の

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

光」となぞらえました。イエス様の時代、「塩」よりも貴重な物がほかにあったでしょう。「光」よりも貴重なものは思い付きませんが、少なくとも「塩」よりも「金」や「銀」のほうが貴重だったでしょう。「あなたがたは金である、銀である」とイエス様は言いませんでした。

もちろん金や銀は貴重ですが、これらは日常生活には用がありません。「塩」は日常生活を支えるものです。ですからあえて、「塩」に例えたのでしょう。しかも塩は使ってしまえば無くなります。どこかで補充しなければなりません。常に塩味を保ち続けるためには、たとえに取り上げてくださったイエスと、緊密に繋がっている必要があるわけです。そうやってあなたの塩を使い果たすことなく、必要な量を保ち続けましょう。

塩を手に入れる方法は、単に買うだけではありません。18日、来週水曜日は灰の水曜日で四旬節が始まります。まずこの日は断食の務めがあります。そして灰の水曜日から40日間の四旬節は、犠牲の季節です。実は犠牲を通して、私たちは必要な「塩」をイエス様に分けてもらうことができ、補充するのです。

あなたの手に、「塩」はどれくらいありますか？あなたの家、あなた自身を「世の光」として灯す「油」は手元にどれくらいありますか？必要な分を、今日ミサの中で願い求めましょう。あなた自身が献げ物となる時、イエス様は必要十分な「塩」と「ともしびの油」を用意してくださいます。

主の年間第6主日(マタイ 5:17-37)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。